

(第3種郵便物認可)

culture salon

カルチャー サ

# 史談・史論

江戸時代の長崎・万屋町に小林謙貞（1601〜84年）という天文学者がいたことをご存じだろうか。科学史の分野では、江戸初期を代表する科学者の一人として有名だが、長崎での知名度は意外なほど低いように思われる。

謙貞が生まれた17世紀初頭の長崎は、ポルトガル・中国からやってくる貿易船や、東南アジア諸国へ向かう朱印船でにぎわう貿易都市だった。当時の船乗りは天文学を駆使して遠洋航海を行ったため、その種の知識に秀でた人々が当時の長崎に現れたことは自然の流れであった。

謙貞は、はじめ林吉右衛

平岡 隆二

## 小林 謙貞

# 忘れられた天文学者



ひらおかりゅうじ 1974年生まれ。大阪市出身。九州大大学院単位取得退学。元長崎歴史文化博物館主任研究員。専門は科学史、東西交流史。著書「南蛮系宇宙論の原典的研究」。熊本市在住。

門という師について天文地理学を学んだ。ところがその林がキリシタンの罪で刑

死するに至り、弟子の謙貞も連座して獄に下ることとなる。

赦免されたのは実に21年後、謙貞67歳の時であった。晴れて自由の身となつて以降は、長崎奉行に学識を認められ、多くの弟子を育て

た。そのうわさは水戸光圀の耳にも届き、家臣2人を派遣して謙貞の下で学ばせている。晩年の1684年には、当時の暦の月食予報の誤りを指摘し、果たして謙貞の予想が的中したという。また西洋流の世界地図を作製するなど、多方面にわたる活躍をみせた。

しかし彼の晩年には、さらなる悲劇が待っていた。84歳の謙貞は、なんと友人に切られて亡くなつてしまふのである。

「犯科帳」によると、殺害したのは同じ万屋町の糸屋八右衛門。彼は息子が無断でつくった借金のため、家屋敷を人手に渡さざ

るをえなくなり、そのことで深く思い悩んでいた。糸屋家は朱印船貿易で財を成した一家で、その居室には初来日時の隠元も寄宿したというから、長崎でも屈指の豪邸だったに違いない。

思いつめた八右衛門は、かねて悪意であった謙貞の自宅を訪れ、無念のあまり自害すると打ち明けた。それを謙貞が論したところ、かえって逆上して切りかかった。その傷で謙貞は5日後に死亡、八右衛門はその翌日打ち首となった。この刃傷事件は当時の長崎でも話題になったようで、他の史料には「（謙貞は）天文博学の者なりけるに惜しき事共なり」とある。

やがて謙貞の学統は絶え、小林家も断絶したらしく、墓地は現存していない。ただし皓台寺には、謙貞が晩年に奉納したと伝わる十六羅漢石像が一部現存している。謙貞の事跡を伝える資料はこのほか少なく、後世に伝えるべき貴重な文化財と言えよう。

授）  
（熊本県立大文学部准教授）